

我々は風景や花に触れて美しいと感じる。音楽を聴いたり、絵や彫刻を見たりしても美しさを感じる。自然のものであれ、人間の手の加わったものであれ、我々はごく自然に美しいという感情を抱く。

同時に人間は自ら美しさを求め、創り出そうとする。絵を描いたり、彫刻を彫ったりするだけではなく、着るものを選んだり、花を飾ったりというふうに、美しいものを進んで生活に取り入れようとする。

ところで、何を美しいと感じるかは、民族や地域や文化によっても、ずいぶん違う。だいたいなことは、文化や伝統が築きあげてきた美しさ、あるいは自分の慣れ親しんだ美しさが全てだと思わず、新しい感じ方に対して心を柔軟に開いておくことだと思う。

僕は一九九〇年代に八年ほどエジプトのカイロで暮らしたことがある。暮らし始めるにあたって、アパートを探したり、生活に必要な日用品をそろえたりした。そのたびに違和感を覚えたのは、エジプトと日本の美的センスの違いだった。

例えば、アパートの内装。外国人が借りるのは、ほとんどが家具付きのアパートだ。しかし、せっかく間取りや場所は気に入っても、置いてある家具になかなかなじめない。ヴェルサイユ宮殿から持ってきたかのような猫足のテール、パーティー会場のようなシャンデリア、金色に塗られた華やかな枠付きの鏡、ピンクに金の花柄をあしらったベッドなど、豪華な印象を与える家具ばかりなのだ。

電化製品もそうだった。扇風機を買いに電気屋に行くと、店に並んでいる扇風機の羽の大半が金色である。ただでさえ暑いのに、金色の羽で送られてくる風なんて、いつそう暑苦しそうである。

妻が靴を買いに行っても、シンプルな黒のパンプスがない。金色のラインが何本も入っていたり、金びかのチョウチョの飾りがくっついていたりする。それがなければいいのにと彼女は言うのだが、エジプトの人にとっては、この金色の飾りこそがチャームポイントなのである。

つまり、シックなものの、シンプルなものというのは、ここでは趣味のよいものとは見なされない。金づくしと、ヴェルサイユ宮殿風の口コ趣味、それがエジプトでは美の条件と見られていたのだ。さすがにツタンカーメンの黄金のマスクの国である。国や文化が変われば、美的感覚は大きく異なるものだと実感したのだった。

ところが、それから三、四年ほどたった頃だ。店で見かける電化製品や家具などの趣味が、明らかに変わってきたことに気づいた。例えば、数年前にはなかなか見つからなかった黒いシンプルな靴が目につくようになった。扇風機の羽も涼しげな色のものが増えてきた。女性たちの化粧も変化した。以前はエジプトで口紅といえば、たいいていショッキングピンクか鮮やかな赤だったのが、シックなブラウン系の口紅をつけた女性を見かけるようになった。それでも日本と比べれば十分華やかなのだが、以前と比べると違和感とは明らかに減った。

言えることは二つある。一つは、さっきも言ったように、何を美しいと感じるかは文化や地域によって、さまざまということ。もう一つは、その感覚は絶対的なものではなくて、時代とともに、あるいは何かのきっかけがあれば「変わる」ということだ。ただ、気になることもある。それはエジプトでも感じたように、美意識の違いによる違和感が、世界的にだんだん薄れてきていることだ。

エジプトにいながら、シンプルな黒い靴や、涼しげな色の扇風機が手に入るのは、そこで生活していた僕たちにとっては歓迎すべきことだった。けれども、それは逆に言えば、金色の扇風機の羽を美しいと感じる感覚が、エジプトから失われることを意味する。

日本人からすれば、「金色の羽はちよつと……」というのは平均的な感じ方だろう。しかし、エジプト人も、あるいはほかの国の人たちも、同じように「金色の羽はちよつと……」と感じるようになることが、本当にいいことなのだろうか。

現在はグローバル化の浸透や、テレビやネットなどの情報メディアの普及によって、世界中の価値観が徐々に似通ってきているように思う。先進国で美しいとされるものが、異なる文化や歴史を持つ国であつても美しいとされるようになってきているのである。

例えば、シックなものやシンプルなものが多いというのも、欧米文化の中で、たまたま現在はそういう価値観が受け入れられているということである。しかし、その価値観だけが支配的になつてしまうことは、そうでない見方を否定し、劣つたものと見なし、まうような乱暴な考え方にも結び付きかねない。

美しさとはさまざまであり、しかも、それは変化する。怖いのは、そのダイナミックな感覚が失われ、ある特定のもののだけを美しいと見なすような、こわばつた見方に陥ってしまうことだ。あるいはその逆に、美しさはさまざまだからといって、自分の感じる美しさの中にとどまり続けることは、かえって世界の美しさを見落とすことにもなりかねない。

「美しい町」や「美しい風景」が初めからあるのではない。そこに美しさを見いだすのは、それを見る我々のほうである。心をしなやかに持つことによって、世界はいくらでも新しい美しさを見せてくれるはずだ。

大徳寺聚光院別院のふすま絵制作の取材のために、アフリカのサハラ砂漠を訪ねたときのことです。

私は、砂漠のデッサンを重ねるために幾度となく、その場所へ足を運びました。砂漠での食事がどういふものなのか全く想像がつかず、万が一そこの食べ物に口が合わないとなると考え、携帯用のしょうゆパックを日本から持っていきました。いざとなったら、出された食べ物にしょうゆをかければ何とか食べられるだろうと思っただけです。

私は、ベドウィン族とよばれる遊牧民の男と二人で旅をしていたのですが、彼はその辺でどこからともなく枯れ枝を集めてきて火をおこし、お湯を沸かしてお茶をいれてくれました。彼はそこに使い古したじゅうたんを敷き、ひびの入ったような何気ないティーカップに紅茶を入れ、たつぷりと砂糖を入れてくれたのです。その古いティーカップも、真つ黒に焦げたポットも見るほどに味わいの深いものでした。なるほど、こういうふうになさく古みを帯びてゆくものが、いちばん使いやすい器なのだ、としげしげと眺めて、私はおいしくその茶をいただいて心からの礼を伝えたのです。程なくそれが、遊牧民の男が亭主となり私が客となった、紛れもない「茶会」であることに気づきました。

これが千利休の考えた茶なのではないか、と私は感じたのです。ひびだらけのティーカップやポット、利休の考えていた茶道具とは元来こういうものだったのでしょうか。高価なものをありがたがって用いるのではなく、すぐここにある何気ないものにその価値を認める。このサハラ砂漠で、何でもないティーカップを通して私は教えられた気がしたのでした。そして見わたすと、まるで火星や月面から電送写真で送られてきた宇宙のような光景が広がっている。日本のお茶の世界では、小さい茶室から宇宙をイメージします。茶室という狭い空間の先に無限の宇宙が広がっているというイメージです。一期一会、二度と会うことのないこの道案内の男が差し出してくれるもてなしの心に感謝しながら、それを十全に味わったのです。茶道という美的体験が時空を超えて伝わってきた瞬間でした。

そして夜になると、トウモロコシや豆のようなものを食事に出してくれました。あるときなどは、地鶏を焼いて塩をかけるなどしてくれました。結局、現地の遊牧民が食べているものが最高においしかった。私の覚悟とは裏腹に、出されたお茶や作ってくれた食事はどれも驚くほどおいしかったのです。そのことは私にとって驚きであり、感動ですらありました。おいしいものはやはり誰が食べてもおいしい、という実体験をしたのです。

それは同時に、このいわば地球の裏側にまで来て、「私とあなたは同じ人間だ」と感じることでできた貴重な体験でもありました。

人間は皆同じである、という体験をお話ししましたが、それでは音楽についてはどうでしょうか。

例えば、ベートーベンやバッハの音楽は、ドイツ人にしか理解できないものでしょうか。ある日本人の演奏家が、「ドイツ人の音楽が日本人に分かるのか、西洋の音楽を日本人が心から理解できるのか。」と批判されたという話があります。ベートーベンやバッハは確かにドイツという国に生まれました。しかし、彼らの音楽はその国の人々だけのものなのでしょうか。そして本当に理解できるのもその国の人々だけなのでしょうか。私はそうは思いません。

芸術作品は発表されたその瞬間に、「皆のもの」になるからです。ですからベートーベンやバッハの曲も発表されたときに、皆のものになったのです。芸術は人類皆のものであり、人々がその曲を同じように聴くことによって体験できる「何か」がとても大切なのです。それを教えてくれるのが美的体験なのです。そしてそのような、全てを超えて伝わってゆくもののことを芸術というのです。

私はアフリカで遊牧民の少年が野に咲く花を摘み、遠来の旅行者にプレゼントする光景を目撃したことがあります。少年は何の考へも情報もなく、花を美しいと感じ、はるばるどこか遠い所から来た人も、この美しい花をきつと美しいと感じるにちがいないと確信して、喜ぶだろうと思ひ、差し出したわけです。もちろんその旅行者は、「ビューティフル」と言って少年の心と花の美しさを感じたわけです。私はその姿を見て、心から感動したのです。美しいものは誰が見ても美しいのです。

人間は驚くほど皆同じであり、うれしければ笑い、悲しければ泣く。おいしいものを食べればおいしく感じる。国境や民族、宗教そして思想をも超えて、人間は皆同じなのです。

そのことを伝えるのが美の役割です。「私たちとあなたたちとは話をしてもとうてい分かり合えない。」この考え方が、現代のさまざまな問題の根にあります。しかし美を共通の体験として人々は、あなたと私は同じ人間なのだ、ということを知ることができるのです。

いつしか、「人間は皆同じである」という感覚が人々に欠如し始めました。その理由には、宗教や政治や思想の違い、経済格差の問題などが挙げられます。しかし、美はその垣根を取り払い、「人間は皆同じである」という大切なことを教えてくれるのです。美は特にこの時代に、とても大切なメッセージを私たちに送り続けているのです。